

国境を飛び越える

中学二年 M・F

私は夏休みの間に、映画「HERO」を見に行きました。「HERO」は、四年前に初めてテレビドラマとして放送されてから、去年の夏にもシーズン2が放送され、とても人気のある作品です。そして、今回の映画では「国境」がキーワードとなっていました。

検事である主人公は、担当した事件の証拠を追っていくうちに、大使館の中に入る必要性を感じます。しかし、容易に大使館に入ることができず、途方に暮れます。八方ふさがりの中、大使館の中へは入ることができなくても、音楽やスポーツや料理など国境を越えるものは他にもある、と主人公は気づきます。そして、その国の人々のことを理解しようと努め、事件を解決しました。

私はこの映画により、改めて“国境”について考えさせられました。今、私達にとって、国境はどのようなものなのでしょうか。

もちろん、国と国を分ける境界線なのですが、他にも重要な役割をしています。国境は、その国やそこに住む国民を守っています。国の利益を損なわないため、そして法律の及ぶ範囲をはっきり決めるためにも、国境は必要であり、重要なものです。

世界には、困っている人々がたくさんいます。幼い子どもから高齢の方まで、本当にたくさんの人々が、たった今も苦しい思いをしています。

「世界が百人の村だったら」という本があります。もし、同じ村の中に飢えて死にしそうな人がいたら、助けずにはいられないでしょう。世界は一つの村であり、皆で助けあうべきなのだと考えています。ところが、国境があるとそれが簡単にできなくなってしまう、ということがあるようです。

例えば、北朝鮮の脱北の問題です。北朝鮮は、かつての日本のように自由な発言が許されていない、軍事国家です。貧しい人は極端に貧しく、幼い子どもは乞食までいます。移住の自由もないので、もし過酷な僻地へ住まわされたら、それは死を意味しているのと同じなのだそうです。そんな生活を逃れるため、脱北を試みる人ができます。しかし、脱北に失敗した場合はとても重い罪となり、成功してもそれから生きてゆける確率は低いのです。たまたま国境を引かれた時に北朝鮮側にいただけで、こんなにも苦しい思いをしなくてはいけないのです。他にも、日々銃を持たされている子ども達、ゴミの山の中で暮らしている人々、例をあげればきりがありません。そんな人たちを、ただ「国境があることで難しい」と言ってみ殺しにできないのではないのでしょうか。

つまり、私は、国境というものが国や国民を守っている反面、障害となって命を奪うことの原因にもなっていると感じています。その障害によって困ってい

る人々を救う方法を探さなければいけません。

今、現在、それができるのが「国境なき医師団」という団体です。国境なき医師団は、民間・非営利の国際団体で、緊急性の高い医療ニーズに応えることを目的としています。この団体のキャッチフレーズに、「国の境目が生死の境目であつてはならない」というものがあります。初めて見た時は、とても印象的で、何ともいえない衝動がありました。そして、困っている人々を助けるためには、若い私達が動かなければいけない、と強く思いました。画面の向こう側にいるせいで彼らの存在を遠くに感じるかもしれませんが、決して私達の間境界はありません。不自由なく暮らせていることは、当たり前ではありません。そのことに感謝しながら、「多くを与えられた者は、多くを求められる」と聖書に書かれているとおり、手を差しのべるべきでしょう。まずは、私達に何ができるのか、真剣に考え、向きあうことが大切だと思います。国境を越えて、世界中の人々がもっと安心でき、子どもは、守られ等しく学べるように、皆で話題にして、もっと話し合っていくべきだと思います。同じ地球という村に生きる隣人なのです。若い私達は知恵をしばり、国境を越えて、共によりよく生きていく未来を創りあげていきたい、と私は考えています。